

■ 平成27年10月21日～10月22日 文教くらし委員会県外調査（群馬県）

1 10月21日 歴史と民俗の博物館「ミュゼ」（吾妻郡中之条町大字中之条町947-1）

【調査目的】

文化財の保護、スポーツ振興、重要伝統的建造物群保存地区について

【調査概要】

歴史と民俗の博物館ミュゼの運営と取組、赤岩重要伝統的建造物群保存地区、まちなか5時間リレーマラソンについて説明を受け、質疑応答・施設見学を実施

<説明の概要>

●中之条町は群馬県の北西部に位置し、新潟県、長野県との県境にある。面積は約439平方キロメートル。山林が面積の8割以上を占め、山間の町である。人口は約17,000人。人口減少、少子化、高齢化、過疎化が進んでいるのが現状であるが、町の魅力を最大に活かして、町の価値を発掘、創造して、全国発信する事業を積極的に展開し、町の振興に役立てようというのが町の姿勢である。

◇歴史と民俗の博物館ミュゼ◇

- ミュゼは昭和57年に中之条町歴史民俗資料館として開館。本館は、明治18年竣工した旧吾妻第三小学校の建物、明治初期の洋風学校建築として全国的にも数少ない建造物。昭和53年に群馬県指定重要文化財に指定され、昭和55年から保存修理を行い復元。郷土の歴史と文化に関する理解を深め、教育、文化の発展に寄与するため歴史民俗資料館として設立。
- 現在、常設展示資料は6千点、収蔵資料全体では約5万点。
- 資料収集・保管の基幹的業務に加えて、中之条の歴史や文化を学ぶ場として、音声ガイドの導入や地域に根ざした企画展、講座・講演会事業などにも取り組んでいる。
- 平成23年度から文化財保護に関する業務もミュゼに移管され、文化財保護行政においても中核的な役割を担っている。

◇赤岩重要伝統的建造物群保存地区◇

- 赤岩地区は、山村の養蚕集落として平成18年に国から重要伝統的建造物保存地区に選定された。その当時では、関東ではまだ3番目、群馬県では初めての選定であった。
- 重伝建地区の範囲は、約63ヘクタール、白砂川が流れ、背後には山林が広がる。
- 地区内には、上(かみ)の観音堂など宗教施設が非常に多く存在する。また、養蚕農家であった湯本家の3階屋の建物などが残っているが、現在では養蚕業を営むところはない。
- 赤岩地区の建物は出梁とせがづくりが特徴で、養蚕のために建物内を最大限利用できるよう2階の外側に通路を設けた。
- 町としては整備を早く進めて観光資源の一つとするため、修理修景事業として町独自の補助を行っている。

◇まちなか5時間リレーマラソン◇

- 平成24年度から毎年12月に開催、今年で第4回目となる。参加者は年々増加している。
- 会場は町の中心商店街。コースは、1周3.5km、高低差36mの特設コース。
- 町の職員提案制度から始まった。新年度予算編成に合わせ職員より新規事業のアイデア募集を行い、翌年度から実施。
- 多くの住民ボランティアの支えにより実施されている。(H26:573名)。
- 大会を盛り上げる仕掛け作りとして「スマイルポイント」を設置し、笑顔の写真を撮影、展示、本人へのプレゼントや、地元の心のこもったおいしい食事をコース沿いで提供。四万温泉の源泉を運び足湯が楽しめるようにしたり、参加者に食事券の進呈などを実施。

【質疑応答】

Q：まちなか5時間リレーマラソンの収支状況はどうか？

A：約1,300万円でイベントはできている。人件費的なものはボランティア。今年は町から350万円を補助を受け、他は参加費と企業団体からの協賛金である。参加費と協賛金だけで実施できるイベントとしたいが、今のところ町から補助がないとへ実施できない状況である。

Q：ミュゼの来館者数の状況はどうか？

A：来館者数は年間約13,000人で、ここ4、5年は推移している。地方の同様の施設としては結構頑張っているほうだと思っている。3月に開催したひなまつり展の時期には、管内の小学生や幼稚園児、近隣町の子どもなどが多く訪れた。



2 10月22日 中之条電力・中之条町役場（吾妻郡中之条町大字中之条町1091）

【調査目的】

温室効果ガス削減、自然環境にやさしい町、景観づくりについて

【調査概要】

一般財団法人中之条電力の取組、中之条ビエンナーレ、芳ヶ平湿原周辺調査事業について説明を受け、質疑応答を実施

<説明の概要>

◇一般財団法人中之条電力◇

- H23年の東日本大震災がきっかけで、自治体として電力の確保に取り組まないといけないという考えから「再生可能エネルギーのまちづくり」に取り組んでいる。
- 平成25年8月27日に法人設立。同年9月10日に、全国100番目の新電力(特定規模電気事業者=PPS)として登録され注目された。同年10月10日から営業を開始した。自治体主導の新電力は全国初の取組だった。電力の地産地消を目指す。出資形態は、中之条町と(株)V-Powerの共同出資である。
- 公共施設へ電力を供給している。将来的には一般家庭の供給も検討している。
- H26年10月から電力供給を開始し、町内公共施設30箇所に供給している。町では約1,000万円の節約になっている。
- 各家庭で節電の努力をしてもらうように、スマートフォンで電力使用状況を確認できるようにし、アンケート調査などを行う実証実験の取組を行っている。
- 地域に根ざした新電力として、地域全体の電力自給自足を実現し、町全体に電力を供給することが可能な電源を確保したい。

◇中之条ビエンナーレ◇

- 平成10年に日本画家の平松礼二氏が若手芸術家の育成を目的として町内の廃旅館を活用して吾妻美学校を開校し、町での作品制作や住民との交流を図った。その成果発表として、都内での展示会を開催していたが、平成18年に町内での開催を町に提案し、中之条ビエンナーレの開催が決定したことが、きっかけとなった。
- 今年度までに5回開催（隔年実施）。第4回は平成25年9月13日～10月14日、37会場、113組の作家が参加し、来場者数は延べ338,000人であった。第5回は平成27年9月12日～10月12日、56会場、163組の作家が参加し、最大規模での開催となった。来場者が一番多かった会場では延べ17,000人が来場した。
- 準備、開催にあたって、行政区や小集落単位で作家の展示手伝いや会場受付の協力をするなど、住民と住民、作家、来場者の交流が積極的に図られ、地域の活性化に繋がった。
- ビエンナーレ未開催年にも小さなアートイベントをすることで、実行委員会と町、町民が文化・芸術に取り組む体制が整った。また文化を通じた市民による自発的な活動、ボランティア活動も活発化している。
- ビエンナーレを契機に、作家やクリエイター、地元出身者が移住するようになったことで、質の高い芸術文化イベントが恒常的に実施できるようになり、町のブランド化が促進された。

◇芳ヶ平湿原周辺調査事業◇

- 芳ヶ平湿原周辺調査事業は、平成24年7月に群馬県内で2番目となるラムサール条約の登録があり、中之条町でも登録に向けて取り組もうということが発端である。
- 調査を進めるに当たって、環境省等関係機関と連携する中で、登録に向けてまず貴重な資料の整理が必要となった。次回登録は平成27年7月頃となる見込みであり、平成25年5月から1年間調査を行うこととなった
- 調査の結果、植物、ほ乳類は1,200種類あった。魚類はまったくなかった。調査の中で、日本固有種モリアオガエルが確認され、日本の中で一番高い所にいるのではないかとされ、大学に調査を依頼し、最高地点での繁殖が認められれば意味のある材料になるとされた。
- 多くの方に助けられながら、平成27年6月、ラムサール条約第12回締約国会議において登録認定証が授与される。
- 調査結果を利用して、平成25年から年に3～4回、自然観察会を開催。
- 今後も貴重な自然の保全と活用、そして観光の場としての芳ヶ平湿原となるよう取り組んでいく。

【質疑応答】

Q：人口約17,000人の町で様々な取組を住民の方と一緒にされているが、役場の職員数、年齢構成はどのようになっているか？

A：職員数は約230人、事務所内には約150人。平均年齢は事務系で約44歳。

Q：中之条ビエンナーレの会場はかなり広範囲にわたっているが、交通手段はどのようになっているか？

A：公共交通では路線バスがあるが、本数が少ない。ツアーバスで来る。公共交通を利用する人よりも、自家用車を利用する人の方が多い。

